



羅針盤

2015年度 第3号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

2015（平成27）年5月13日発行

日曜日の朝に「ボクらの時代」というトーク番組がある。毎回、3人の有名人が鼎談する。ときどき興味深い話題に及ぶ。2015年4月12日（日）の放送は「前園真聖×三浦知良×中田英寿」という、サッカー選手の組み合わせだった。最年長の三浦だけが現役である。

コントロールできることとできないこと

イタリアで活躍した中田は、三浦にとっても興味深い存在であるらしい。現役時代、試合前に緊張や不安を抱いたか尋ねた。中田が「あります」と答えると、あとの2人は意外だったようだ。前園が「それは、見えないですね」と驚くと、三浦も「見えなかった、まったく」とため息をついた。中田が「試合に入って最初のひとプレーがきちんとできるまでは、やっぱりありましたね…」と付け加えると、2人も頷いた。ところが、中田が「だけど逆に言うと、ロッカールームでの緊張って、あんまないかも…」とつぶやくと、三浦は「あ、ない？ 若いときでもなかった？」と興味津々。中田が「出て行く、あの瞬間とかはあっても、ロッカールームでは、早く時間経たないかなあ、長いなあと思いながら、下手したら寝てましたよ」と応えると、三浦は「じゃ、前日に、次の日勝てるかなとか、いいプレーできるかなとか、そういうのはあんまり考えなかった？」と畳みかける。中田は「今でもそうなんですけど、考えてもしょうがないことは考えないですね。だから、考えないですね」と素っ気ない。三浦が「おれは考えていたよ」と正直に告白しても、中田は「明日の天気どーかなーとか考えても、わかんないじゃないですか。無駄だなーと思って」と冷静。前園は呆れて笑い出し、三浦は感嘆、「おれ結構、緊張したりあがったり、前の日からした」と吐露した。キングカズが、中田の前では素朴な若者に見えた。

印象的だったのは、中田の「考えてもしょうがないことは考えない」という判断である。

少し前だが、こんな新聞コラムが目にとまり、切り取った。

松井は地元マスコミに批判記事を書かれても、全く気にしない。「だって、記事を僕がコントロールできないですからね。気にしても仕方がないことは気にしません」と松井は言う。

イチローは首位打者争いをしている時、ライバルのことに話題が及ぶと、話を打ち切った。「相手の打率は僕にコントロールできない。愚問ですね」

自分にコントロールできることと、できないことを分ける。そして、コントロールできないことについては関心を持たない。これが超一流と呼ばれるアスリートの必要条件だといってもいい。

「朝日新聞」2007年6月26日夕刊

松井もイチローも、アメリカで活躍した野球選手である。もちろん、イチローは今も現役である。

中田が口にしたのは、翌日の試合についてであった。松井はマスコミ、イチローはライバルについて述べている。発言の対象は違うけれど、3人の割り切り方は同工異曲——とてもよく似ている。

自己完結する課題は自分の努力や工夫で何とかできるけれど、相手がいる問題は、相手の能力や調子まではコントロールできないから考えても仕方がない。考えても仕方がないことは考えない。

芸能界のことになるが、SMAPの中居正広は、北京公演に関するNHKの特集番組の中で「努力すれば、成功は保証されないけれど、成長は保証される」と語っていた。びっくりした。同じだね。相手が必要な成功はコントロールできないけど、自己完結する成長はコントロールできる。

このことは、努力は報われるか報われぬか、という問題でもある。中居くんのことばを借りれば、「成長」としては報われるけれど、「成功」として報われるとは限らないのである。

現代思想の内田樹が、この問題を論じている（『下流志向—学ばない子どもたち 働かない若者たち—』講談社、

2007)。しかも、最終的には現代の格差社会を生き延びる方法につながる。

内田は、日本の政策が**集団主義**から**個人主義**に方向転換したことに注目する。日本は、戦後長い間、和を重んじる**集団主義**を採用してきた。「これだけ努力すれば、これだけの社会的リソース（資産）の分配に与^{あずか}れる」という社会であった。勉強の「努力」は実力に見合った学校への入学という「成果」によって報われ、職業、昇進…と影響していく。近年、個人主義的な要素が強まると、個性の確立といえは聞こえはいいが、自分の面倒は自分で見ろということになってしまった。強者が勝ち、弱者が喰われる仕組みである。

学校システムでは、「**リスク化**」と「**二極化**」が生じる。「リスク化」とは、社会の不確実性が増し、個人的には将来の生活予測可能性が低くなるということ。大学を出ても、大企業に就職しても、生活の安定は保証されない。こうして**努力と成果の相関関係**が崩れ始めると、集団が「二極化」する。「努力が報われたもの」と「努力が報われなかったもの」の間に階層格差が生じるのである。大学を出ても、正規社員と非正規社員では大きな違いがある。学歴や能力に遜色がなくても、待遇や将来性に大きな差がつく。

この二極化は**リスク社会をどうやって生き延びるか**という生存戦略の選択において、さらに進行する。学校では、成果の確実性が薄れても学習努力を続ける子どもと放棄する子どもとでは、明らかな学力差がついてしまう。努力におけるわずかな入力差が成果において大きな出力差として現れるのである。その感覚は、親から子へと受け継がれる。努力が報われた親は、学力は役に立つという思考を子どもに伝え、努力が報われなかった親は、学力に対する不信感を子どもに語ることになる。二極化は増幅され続ける。

リスク社会では努力と成果のあいだの相関関係が崩れてくると先ほど申し上げました。でも、実際には、この相関関係は全社会で均一に崩れるわけではありません。それは局所的にはいまだ活発に機能しており、ある階層において集中的に崩れています。つまり、リスク社会におけるリスクはすべての社会成員に均等に分配されているわけではなく、階層ごとにリスクの濃淡があるのです。そして、自分たちが生きているのは努力と成果が相関しないリスク社会であるということ認め、それゆえ「努力してもしかたがない」という結論を出しているのは、いちばん多くのリスクをかぶっている階層なのです。

まことに逆説的なことですが、このリスク社会における生存競争において有利な位置を占めているのは、**僕たちの社会が努力が必ずしも報われないリスク社会であるという基礎的事実に逆らって、依然として努力している人々**なのです。

(83~84頁)

中田も、松井も、イチローも、中居くんも、「僕たちの社会が努力が必ずしも報われないリスク社会であるという基礎的事実に逆らって、依然として努力している人々」ということになる。

大切なのは、努力することなのである。努力は報われるかという疑問は、その疑問を持つこと自体が努力の足を引っ張ってしまう。報われると信じるほうが努力しやすいのなら、そう信じるほうがいい。報われるかどうかはコントロールできない問題だから考えない、というのもいい。客観的な事実は問題ではない。現実がどうであれ、周りがどう言おうが、信じて突き進めばいい。芸術家でもスポーツ選手でも、成功した人は「努力は人を裏切らない」「練習は嘘をつかない」と口にする。

人生を悲観的に考えるか楽観的に考えるかという問題に似ている。**悲観的に考えて努力をやめるくらいなら楽観的に考えたほうがいい。楽観的に考えて油断するような人は悲観的に考えたほうがいい。**

愚の骨頂は、努力している人の背中に向かって「努力しても無駄だ」と指摘することである。その結論に引きずられると、グループ全体がリスクをかぶる階層になってしまう。逆に、**努力すれば報われる**という空気を、豊多摩というグループの中に作り出し、それを吸うことである。勉強でも、スポーツでも、学校行事でも。それが結果的に、成長にも成功にもつながる。

上級学校入学にあたっての予約奨学金等説明会 3年生対象

5月15日（金） 15：30～17：00 視聴覚室

中心は、日本学生支援機構の奨学金です。必ず自分で参加すること。詳しくは、教室の掲示参照。